

# 『古今和歌集』「仮名序」は **ため息が出る**

## うつくしいぶんしょう ほど美しい文章ですよ



## あんき 暗記しちゃいましょう！！

『古今集』は、延喜五年（905）に、醍醐天皇の命によって、紀友則、紀貫之、凡河内躬恒、壬生忠岑が編纂しました。

冒頭にある仮名序は、選者の一人、紀貫之が、和歌の本質、期限、技法、

歴史、そして『古今集』編纂の経緯などについて論述したものです。

古典文学における序文の規範になったのみならず、評論文学の先駆としても大きな意味を持っています。

ここでは、最初の部分を味わってみましょう。

すらすら言えるように覚えてしまうのも、お薦めです。

自分が書く文章も、それとなく格調高いような表現に知らず知らずのうちになっていくかもしれませんよ。

〔仮名序〕

やまと歌は <sup>うた</sup> 人の <sup>ひと</sup> 心 <sup>こころ</sup> を <sup>たね</sup> 種として <sup>こと</sup> よろづの <sup>は</sup> 言の葉とぞ なれりける

和歌は、いわば人間の心を種として生い茂った とりどりの言語の葉だといえよう



よのなか <sup>ひと</sup> 世の中にある人 <sup>しげ</sup> ことわざ <sup>きく</sup> 繁きもの <sup>なれば</sup>

<sup>こころ</sup> 心に <sup>おも</sup> 思ふ <sup>こと</sup> ことを <sup>みる</sup> 見るもの <sup>きく</sup> 聞くもの <sup>につけて</sup> につけて <sup>い</sup> 言ひ <sup>い</sup> 出だせるなり

この現世に生きている人間は、様々な出来事にかかわるものなので、その折々の心情をみるもの聞くものにつけ表現するものである

はな <sup>なく</sup> 花に <sup>うぐいす</sup> 鳴く <sup>みず</sup> 鶯 <sup>すむ</sup> 水に住む <sup>かわ</sup> 蛙 <sup>こえ</sup> の声 <sup>き</sup> を聞けば

<sup>いき</sup> 生きとし <sup>しい</sup> 生けるもの <sup>うた</sup> whichever <sup>うた</sup> 歌をよまざりける

花に鳴く鶯、水に住む蛙の声を聞けば、ありとあらゆる生き物のうち何か歌を詠まないものがあるだろうか

ちから <sup>いれ</sup> 力をも <sup>ずして</sup> 入れずして <sup>あめ</sup> 天地 <sup>うご</sup> を動かす

<sup>め</sup> 目に見えぬ <sup>おに</sup> 鬼神 <sup>をも</sup> をも <sup>あは</sup> うれ <sup>おも</sup> と思はせ

<sup>おとこ</sup> 男女 <sup>おんな</sup> のなか <sup>をも</sup> をも <sup>やは</sup> やは <sup>らげ</sup> らげ

<sup>たけ</sup> 猛き <sup>もの</sup> ものの <sup>ふ</sup> の <sup>こ</sup> 心の <sup>をも</sup> をも <sup>なぐ</sup> 慰む <sup>る</sup> るは <sup>うた</sup> 歌なり

力も入れずに天神地祇（てんしんちぎ。天や地を守る神々のこと）を動かし、目に見えないもろもろの精霊たちをも 感慨にふけらせ男女の仲もやわらげ、勇猛な武人の心をも慰めるのは歌である